

James L. Helvia 著

*English Lessons: The Pedagogy of
Imperialism in Nineteenth-Century
China*

木 畑 洋 一

—

改めて強調するまでもなく、最近、帝國や帝國主義についての研究は内外を問わずきわめて盛んになっている。冷戦終焉後の世界の状況、とりわけ「九・一一同時多発テロ事件」以後のアメリカの姿勢がこうした帝國論、帝國主義論の活性化に拍車をかけてきているのである。このような仕事の中には皮相な議論も多くみられるが、地道なすぐれた研究も着々と現れてきている。一九世紀半ばから二〇世紀初頭にかけてのイギリスと中國の關係に獨自の視角から分析のメスを入れた本書も、そうした地道な成果の一つである。

著者ヘルヴィア氏は米國のノース・キャロライナ大學の教員であり、本書に結實した研究には一九八六年に着手したという。本書はその努力の厚みが十分にうかがえるものとなっている。まず本書の構成を紹介しておこう。

第一章 序論 帝國主義・植民地主義・中國
第一部 アロー戦争と平和友好通商條約

第二章 アロー戦争 一八五六一一八六〇年

第三章 中國における暴力と法の支配 一八五六一一八五八年

第四章 北京一八六〇年 略奪、獲物、重々しい報復行為
第二部 中國の再領域化 一八六一一一九〇〇年

第五章 新秩序の構築

第六章 ヨーロッパの世界的ヘゲモニーの時代における中國
第三部 中國の完全な平等化へ

第七章 恐怖の支配 北京と周邊における懲罰と報復

第八章 清朝の神聖な權威の剝奪 一九〇〇—一九〇一年

第九章 記憶の裝置 犠牲者と英雄としての西歐の記憶

第十章 被抑壓者の復讐、再興と中國の愛國主義

以下、本書の内容を紹介しつつ簡単なコメントを加えていく。

二

序章（第一章）では、著者の問題意識と方法論が開示されている。その冒頭で著者が本書のタイトルとして「イングリッシュ・レッスンズ」という言葉を選んだきっかけとなった一枚の寫眞が取り上げられているが、その部分はきわめて興味深いので、本書評においても少しスペースをとって紹介しておこう。

それは、イングランド南海岸の觀光地ブライトンで一九〇一年

頃に觀光客向けに作られた『中國における義和團員處刑のユニークな寫眞集』という小冊子の中の一枚の寫眞である。畫面の中央では、今しも一人の義和團員の首が切られようとしており、畫面の左下にはすでに截首された二つの遺體が並んでいる。遺體の首があつたはずのところからは、おびただしき血が流れ出して地面にたまっている。處刑の場面は多くの人々によって見守られているが、そのほとんどは中國の民衆であり、また警官や役人とおぼしき人々も立っている。左の方に三人だけ、全く異なった服裝の人物がいるが、著者はインド軍の兵士であろうと、推察している。このような寫眞を通して、ブライトンを訪れた觀光客は「野蠻な」中國人に教訓を與え「文明化の使命」を全うしようとするイギリス帝國の姿に觸れたのだ、と著者は論じつつ、この寫眞の中にみられる一枚のピラに注意を向ける。それは、畫面の右の方にある太い柱に貼り附けられた「英文學堂」の宣傳ピラである。近くの學校で開かれる英語教室についてのこのピラがおどろおどろしい處刑風景の傍らに何氣なく寫っていることが與える強い印象から、著者は本書に「イングリッシュ・レッスンスズ」というタイトルを附すことにしたのである。その際著者が念頭に置き、本書の中心的主題となった問題を、著者は次のように表現している。「帝國主義が軍事や經濟をめぐる問題にとどまることは常にありえなかつた。帝國主義はまた、特定の地理的スペースをヘゲモニーのもとにおいて支配しようとする力や主體に對する抵抗やそれらの受容を含む文化をめぐる過程でもあつた。」(三頁)

本書の中では、寫眞や繪が随所できわめて效果的に用いられて著者の敘述に彩りを與えているが、この冒頭の一枚の寫眞はとく

に印象的である。それを手がかりとして著者はこのように自らの立脚點を明確にした後で、帝國主義時代の中國についての研究史の批判的検討に移る。そこでは、ジョン・フェアバンクに代表される研究の流れが西歐による中國の近代化に着目したのに對して、ポール・コーエンなど中國自體の主體性を重視する「中國中心的」な研究が最近の主流になってきたとしつつ、帝國主義の文化プロセスに重點を置くことによって「中國近代の性格論議に帝國主義と植民地主義の問題を再導入する」(二四頁)という著者の姿勢が打ち出される。評者はイギリス帝國主義の研究者であり、中國近現代史研究については詳細な知識をもたないが、それでもマルクスとフェアバンクのみに即して一方の研究の流れを説き、「中國中心的」と評する最近の研究の流れが帝國主義の問題を完全に輕視してきたかのように論ずる著者のこうした研究史整理は、粗すぎるという印象をもつ。

しかし、それはそれとして、帝國主義の時代が世界史のそれまでの時代における帝國支配とは區別されるさまざまな様相を呈していたことを的確に指摘した上で、植民地化された側をも能動的主体 *subject* とする動的なプロセスとして帝國主義の問題をとらえ、植民地支配のあり方の多様性、植民地化する側と植民地化される側の間の境界線の曖昧さ、不安定さを強調する著者の議論それ自體は、説得的である。ただし、本書評の最後でも述べるが、具體的な分析で著者がそれに成功しているかどうかは、また別の話となる。

三

先に示した目次に示されるように、この序論を受ける本論部分は三つに分かれている。第一部は、第二次アヘン戦争（アロー戦争）を対象とし、第三部は義和團運動の時期を扱う。そして第二部でその間の時期、すなわち一八六一年から一九〇〇年までの時期が論じられる形となっている。本書の重點は、第一部と第三部に置かれている。アロー戦争においても義和團鎮壓においても、イギリスは中國側に對する攻撃、破壊行為を行い（こうした過程を著者は脱領域化 *deteritorialization* と呼ぶ）、その結果の上に立つて支配力を擴大していった（この過程を著者は再領域化 *reterritorialization* と呼ぶ）。アロー戦争と義和團鎮壓の間で、その攻撃・破壊と支配力擴大の過程にあらわれた違いを、第二部の議論によって説明する、という構造に本書はなっている。

本論部分の最初に置かれた第二章は、アロー戦争の過程をクロノジカルに解説したもので、いわば教科書風の敘述であり、とりたてて特色はない。この章で紹介された事實經過を踏まえた上で、第三章では、中國におけるイギリスの勢力擴大をもたらしただものとして、四つの要因が論じられる。その四つとは、アヘン、軍事技術、翻譯、ヨーロッパ的主權概念を植えた仕組みである。これらの内、アヘンと軍事技術については特に新たな知見があるわけでもなく、ここで改めて紹介する必要はない。しかし、後の二要因については説明が必要であろう。

まず翻譯であるが、清朝の官吏とイギリスの外交官の交渉に關わる中國語から英語への翻譯のあり方が、「暴力の特別な形、別

の手段による戦争」（五七頁）といつてよいものであったと、著者は主張する。ここで著者が問題とする翻譯には二つの面がある。一つは中國語の單語の英譯の仕方（たとえば夷が野蠻人 *barbarian* と譯されたこと）であり、それが中國側の姿勢についてのイギリス側の思考方法を規定したという点である。今一つは、中國側の官吏間で交わされていた書簡が戦争の過程でイギリス側の手の中に入り、それが翻譯されてイギリス側の交渉の武器となったという点である。いずれも重要な指摘ではあるものの、同じ翻譯といつても、これら二つは全く別の問題であり、後者は情報収集とその利用に關わることで、兩者を並べて論じることには疑問が残った。

次に、ヨーロッパの主權概念を植えた仕組みとは、たとえば中國側が重視する外交儀禮としての叩頭が否定されて、ヨーロッパの側で作り上げられてきた主權國家としての獨立性と對等性を示す儀禮（大使同士の挨拶の仕方など）が固執されたことをいう。著者はこの問題を説明するに際して、叩頭に示されるひざまづく姿勢は女性性を示すものとみられ、それに對してヨーロッパ側が重視した起立した姿勢の方は男性性を示すものと考えられたとして、「國家主權の概念に結び附けられた男性性のエートス」（六八頁）といった表現を用いている。帝國主義のもとの支配―被支配の關係を男性―女性の關係に重ねてみることも、最近の研究の中ではよく見られるし、評者も一般論としては妥當であると考えているが、ここでの解釋はどちらかというと牽強附會であるう。

第三章ではさらに、これらの要因を前提として、イギリス側が

中國に對する支配を擴大し中國側を「教育」しようとした動きとして、一八五八年における北京での英公館設置問題と、同年に上海で開かれた關稅會議とが扱われている。

續く第四章では、アロー戦争の最後の局面となった圓明園の破壊と略奪行為に付與された意味と、略奪された品々のその後の扱いが問題とされる。たとえば、略奪を行うことによる「劣等な」人々との接觸が帝國側の軍隊に對して汚染効果をもったという説明がなされたことが紹介されるとともに、それが軍隊内の階級差問題に結び附けられたことも指摘される。略奪された品々はオークションにかけられたり、王室關連のものはヴィクトリア女王に献上されたりしたし、イギリスの博物館におさまる物も多かった。著者は、こうした品物を見る眼が、圓明園をはじめとする中國の建築や庭園を女性的・子供めいたものと見た視線と通底していたと論じているが、前章ではその適用に無理を感じたこの論議の流れはここでは自然である。こうした視線はまた、圓明園破壊直後の北京條約調印に關してもみることができた。調印の場の選定や中國人官吏に對する姿勢にも、また調印式の情景や皇帝の様子についてのヨーロッパ側の敘述にも、中國側を貶値する内容が満ちていたのである。そうした状況の中でイギリス側全權エルギンが外交的手續きについての「レッスン」ともいえるものを皇帝に與えたと著者は論じているが、本書の表題となっている「イングリッシュ・レッスンズ」の意味はここでよく浮かび上がってくる。

四

第二部に入るとまず第五章では、アロー戦争後新たに獲得した有利な状況を利用して、イギリス側が中國についての知をいかに収集、蓄積、整理していき、それをまた中國に對する「レッスン」のために用いていったかが論じられる。中國についてのこうした知識の傳達と蓄積、またその整理、カタログ化のことを著者は帝國的アーカイヴ *imperial archive* と呼んでいる。この表現は、著者も引いているトマス・リチャーズという研究者が十數年前に出した著書のタイトルに用いられたものであり、文化面での帝國主義的作用をよく示す言葉であるが、著者もそれを效果的に用いている。ここで着目すべきは、こうした知の集積作用に際して、中國に置かれることになったイギリスの在外公館や、中國海關が大きな役割を演じていたことであろう。北京に置かれた公使館員であったトマス・ウエイドやステイヴン・ブッシュェル、海關に勤務していたアメリカ人ホウジー・モースの業績を著者は高く評價する。彼らの仕事によつて中國に關する西側の知識は體系化され、そうした體系化された知識を西歐側は中國に對する外交關係の中で利用していったのである。一八七三年にイギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、ロシア、日本の公使たちは皇帝に謁見する機會を得ることになったが、その際に中國側がそれまで通り固執した叩頭の禮を彼らが拒否する上でも、こうして蓄積された知識が大いに利用された。

續く第六章は一九世紀末までの長い時期を対象とし、アロー戦争を扱った第一部と義和團鎮壓を扱った第三部との間を架橋する

部分となっている。ここで著者は、中國が「瀕死」の状態に陥っていたわけではないことを強調している。それを示す點として、中央アジアにおける中國の政策がイギリスのインド政策にも似て、支配權への抵抗を生じさせないようなさまざまな技巧を弄したものであり、清朝側による帝國的アーカイヴの構築もなされたことや、ロシアの進出に對抗して新疆の確保に成功したこと、清佛戰爭においてよく軍事力を發揮したことなどをあげている。問題はそうした實情にもかかわらず、改革をなしえない病んだ存在というイメージが中國についてなぜひろがったかということ（そのイメージは日清戰爭での中國の敗北によって確たるものとなった）であるが、その要因を著者は一八六〇年代以降に大きな變化をみた人種觀に求めている。この頃以降人種の違いを生物學的に説明しうるものとする科學的人種主義が力をもつていき、そこで想定された人種ヒエラルヒーの中で中國人を含む黃色人種は中間的な位置を占めるものとみなされたという指摘は正しいが、特に新味があるものではない。著者は、さらに「面子」を重んずる（つまり内容よりも外觀を重視する）點を中國人の特色とみなす見方がヨーロッパでの中國論において大きな位置を占めたことに注意を促している。この點は次章での議論の前提として重要である。

五

第三部では、義和團事件鎮壓問題が、第一部のアロー戰爭との比較のもとで分析される。

第七章では、義和團鎮壓時の破壊や略奪が論じられる。著者によると、義和團鎮壓行動に出た西歐（さらに日本）勢力は、ア

ロー戰爭以降の時期、すなわち第二部で扱われた時期に中國について蓄積された知識を用いて、中國側に「レッスン」を與えようとしたという。前章で「面子」が重視された理由もここではつきりする。すなわち、義和團鎮壓に際しての中國人に對する報復は、まさに「面子」を失わせることを意識しつつなされたというのである。彈壓軍が紫禁城に入城したこと、その壁や門が意圖的に破壊されたことが、そうした意味合いをもった行動として論じられる。略奪行為は、一八六〇年の時と比べて地域的にも時間的にも擴大した形で行われたし、義和團のメンバーに對する報復を、西歐側は中國の方法と彼らがみていた斬首によって行つた。公開處刑で實際に手を下す役は中國人に託されたが、こうしたやり方こそ、西歐側が蓄積してきた中國についての知によく呼應するものと考えられたのである。

さらにこの章では、このような略奪などの行為に對する批判の聲が西歐側や日本（萬朝報の議論が引かれている）であげられてきていたことが紹介されている。この點は確かに重要であるが、本書全體の議論の流れからいうとこれへの言及が必要かどうかは疑わしい。

破壊や略奪後の「再領域化」のプロセスを扱うのが第八章である。著者はまず、一九〇一年九月に調印された最終議定書に盛り込まれた要求の文面を、中國が「野蠻」から「文明」に移行するための謝罪と懲罰の手續きを提示し、さらに西歐國際秩序に中國を組み込む道筋を示したものとして讀み解いていく。その際特に重視されるのが、最終議定書の第一九附屬文書、すなわち皇帝の謁見手順に關する取り決めである。本書で繰り返し強調されてい

るように、皇帝との謁見の形式は、西歐諸國と中國との間の矛盾が鋭くあらわれた點であつたが、この附屬文書での取り決めによつて、西歐國際秩序の優位がさらに明確になつていったと著者は指摘する。たとえば、それまで外國政府からの文書を皇帝が直接受け取ることはなかつたが、この取り決めでは、「直接自らの手で」受け取ることとされたのである。清朝皇帝の位置の變化は、その後紫禁城に西歐人觀光客が入りこみ、その内部の寫眞が多くとられて一般に廣められていったことによつて、ますます進んでいく。著者はこのような物理的・視覺的侵入状況を、西歐諸國の博覽會などでの非西歐地域の文物の展示になぞらえている。また、帝國主義本國の人々の視覺に訴える手段としては、北京の破壊や義和團員の處刑などを題材とした繪や寫眞が用いられた。本書冒頭に掲げられた寫眞はその代表的な一枚である。皇帝の謁見形式に見られる西歐側の優位の確立、視覺とイメージを媒介としての西歐側の支配力の確認を主題とする本章は、本書の議論が集約された部分として、評者には特に興味深かつた。

續く第九章では、義和團鎮壓についての記憶を作り出す裝置がいかにして生み出されていったかが扱われる。その一つは、宣教師による語りである。宣教師たちは自らを義和團による攻撃の犠牲となつた英雄として、さらには殉教者として表象しつつ、義和團事件についての記録を書き上げた。このことを説明するに際して著者は舊約聖書や新約聖書の語りの論理を引き合いに出しているが、それをあまりに強調している點にはいささか無理が目立つ。しかし、義和團によつて犠牲者が出た場所をいわば聖地として、そこでミサなどを行いながら中國の新生のための力となろうとし

た宣教師たちの行爲を、犠牲と再生という聖書のイメージに託して論じていることの方は、かなりの説得性がある。ただし、二〇世紀初頭に中國に赴いた宣教師の数が急増した要因を、この論點に直結させているのは短絡的といえよう。こうした宣教師たちによる義和團の記憶手段の創出は、米國のオバーリン・カレッジでの、オバーリン・メモリアル・アーチ（カレッジに關係していた一八人の宣教師に捧げられたもの）の建造といった形で、中國の外においても行われていった。このように宣教師に關わる問題を取り上げた後、第九章の後半部は、兒童・若者向け文學（たとえば帝國主義を鼓吹した兒童向け作家として著名なヘンティの作品、演劇、新しいメディアであつた映畫などが義和團鎮壓をどのように取り上げたかが論じられているが、この部分はどちらかといえば新味に乏しい。

第一〇章は、次の「あとがき」と合わせて結論部分となつており、本論で議論されてきた點が二〇世紀にいかにか展開したかが語られている。まず對象とされるのは、サックス・ローマーが作り出した人物像フリー・マンチューである。フリー・マンチューは、イギリスなど西歐側が「レッスン」の對象とした中國人官吏の資質を體現した人物であると同時に、西歐の科學をマスターした人物であり、そうした存在を介して中國が復讐してくる可能性についてのイギリス側の恐れともいふべきものが投射された人物であつた。こうした恐れは、中國革命を経てまた再生し、現在も續いていると著者はみている。次いで、映畫「北京の五五日」や、各地の博物館に收藏されている中國からの略奪物などの例を引いて、本論で扱われたような問題が西歐側に一貫して存在していること

に注意を促した後で、著者は、西歐の人々は過去を忘れてしまったかもしれないが、犠牲者であった中國側にはそうした贅澤は許されていないという重要な指摘を行い、中國の人々が過去の恥辱をいかに傳えているかというところを、歴史敘述や圓明園博物館での展示などに據りつつ紹介している。「中國における西歐帝國主義・植民地主義を見よう」としないう姿勢をとれば、黨の要人だけでなく一般の中國人も抱いている愛國心や誇りの表現を理解することは困難となる」という著者の指摘は、當たり前のようであって、ここでいう西歐の中に含まれる日本人が忘れがちな問題である。

六

略奪や皇帝の謁見儀式などの行爲の形の意味を読み解き、對象についての知の蓄積のあり方や視覚に訴える表象の仕組みに分けて入って、イギリスが中國に對してふるった支配力を支えた文化の構造を明らかにしていくことに、本書はかなりの程度成功している。近年盛んになってきている「新しい帝國史」の大きな特徴は、帝國・帝國主義をめぐる文化の問題に大きな比重がかけられるという点であるが（参照、平田雅博「新しい帝國史とは何か」歴史學研究會編『帝國への新たな視座』青木書店、二〇〇五年所収）、本書はとりわけ米國において盛んになってきた「新しい帝國史」の一つの代表作と考えられる。しかしそれだけに、「新しい帝國史」にありがちな陥穽も、本書には見て取ることができる。その點に特に留意しつつ、全體にわたってのコメントをいくつか行ってみよう。

まず指摘したいのは、歴史敘述のスタイルの問題である。以上

の内容紹介を行うに際して、評者はできる限り普通の言葉を用いようという心がけてきた。例外は再領域化という言葉である。先にも記したが、著者は中國に對する西歐側の攻撃や破壊行爲が行われる過程を脱領域化と呼び、その結果の上に立つて西歐側が支配力を擴大していった過程を再領域化と呼んでいる。従って評者としてもとりあえず再領域化という言葉を紹介に際して用いたが、紹介を終えた今、なぜこうした表現を用いなければならないのかという疑問は消えない。評者は「新しい帝國史」に強い影響を及ぼしたカルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究がことさらに難解な用語を用いることが大きな問題であることを、帝國史研究の立場からかつて指摘したことがあるが（木畑「思想の言葉」ポストコロニアリズムと歴史學」『思想』八九七號、一九九九年三月）、本書も、極端な例ではないものの、その弊を免れていないのである。

次の點は、文化と政治・經濟の關連である。文化に重點を置いた分析を、いかに帝國主義の政治、經濟と結合させていくかは決して容易な課題ではなく、「新しい帝國史」の流れの中でも、それは十分に行われているとは言いがたい。著者はその點についての問題意識をもっているようにみられる。それは、以上の内容紹介に當って評者が紹介を完全に省略した論點にうかがうことができる。その論點とはイギリスとロシアの中央アジアをめぐる競合（グレイト・ゲーム）であり、著者はその様相をいくつかの個所で取り上げ、この問題を扱うことを、文化についての分析とイギリスの對中國關係をめぐる國際政治の動態とを結びつける糸口にしようしているのである。しかし、グレイト・ゲームをめぐる部

分は本書全體の議論とはうまく接合しておらず、著者の目論見が成功しているとは思われない。

第三は、文化を重視するに際してひとつの鍵となる人種主義の扱い方に關する點である。第六章の紹介に當つて、著者が一九世紀後半におけるいわゆる科學的人種主義のひろがりをもった意味を強調したという點は指摘しておいた。その他の個所でも、著者は本書の主題にとって人種主義がもった意味の大きさについて繰り返し言及している。しかし、人種主義についての著者の議論には、獨自性があるとは思われない。英中關係をめぐる著者自身の分析から、何らかの形で人種主義についての既存の議論を豊富化させる手立てがあつたのではないかと思われるだけに（たとえば「面子」についての議論と人種主義の關連をより明確にするなどの形で）、少々残念である。

人種主義との關わりであげておきたい本書での興味深い論點として、英中關係の中におけるインド人の位置という問題がある。本書の冒頭で紹介された寫眞にもインド人兵士が寫つていた。また第四章では、略奪したものをオークションにかけることが、インド人に規律を示す意味をもつていたと論じられているし、北京條約調印の儀式についてあるイギリス人將校が、「パンジャブ人たちは、それを見じめなダーバー」「インドの藩王などの謁見、會見」だと思つたし、中國のことを顔に毛もない老婦人のように見えると思つた。（一一六頁）と記したことが紹介されている。第八章で扱われた「中國の宇宙の中心に立つイギリスの兵士」という繪には、天壇の中に立つイギリス兵と彼に付き従う形のインド兵とが描かれているが、ここでは英中關係の新たな構圖を示す繪

の中にインド兵を挿入することによって、アジアでのイギリス帝國の力が示されたのである。こうした形での人種關係の重層性が働いた場として中國を捉えてみることも、一つの重要な視點である。

本書評を終わるに當つて、最後に述べておきたい點は、本書における中國側、中國人側の扱いである。結論部分である第一〇章では、廣く二〇世紀を對象として中國人側の主體的な動きが觸れられているが、本論部分にあらわれる中國人は、新疆に對する中國の政策などが論じられている個所があるとはいえ、概してイギリス側の行動や視線の對象となる客體としての姿に終始しているといつてよい。これからの帝國史や帝國主義史のめざすべき方向が、支配する側と支配される側雙方の姿を視野に入れ、しかも支配―被支配の二分法で切れない領域を尊重していくものであるとするならば、本書はその要請には應えていない。本書評の最初の方で紹介したように、著者自身、植民地化された側をも能動的主体とする動的なプロセスとして帝國主義の問題をとらえるという課題を掲げていたわけであるが、それを實踐したとはいひ難いのである。

とはいえ、評者も中國史そのものについてはきわめて疎く、この書評ももっぱら支配する側の問題に即したものとなつてしまつた。その點を一言お詫びしたいと思つている。

Durham and London: Durham University Press,

2003, xviii + 387 pp.